

---

# お姉ちゃん改造計画

トニー伊藤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お姉ちゃん改造計画

### 【ZPDF】

Z62810

### 【作者名】

トニー伊藤

### 【あらすじ】

システムの弟が姉のために頑張るお話。弟はダメなタイプのシステムです。

## 第一話 姉はマジ天使

いきなりで何だが、俺はパソコンである。それはもうお姉ちゃんが大好きで仕方がない。

陳腐な設定で悪いが、七歳の時に両親が死んだ。一人とも仲が大層よろしくて、子供の俺を近くに住んでいる親戚の家に預けて遊びに行つていた時、二人は事故で死んだ。そしてそのままその親戚の家に引き取られたのである。

そう、その親戚の一人娘が俺の姉だ。初めて会った時、第一印象は特になにもなかつた。特別可愛いとも思わなかつたし、そこら辺にいる女子と大差はなかつた。しかし、その性格はファンキーとか例えられないくらいアグレッシブなものだつた。

初めて親戚の家に預けられた時、初対面で、『その陰気な雰囲気が気に食わない』と言つて顔面をグーで殴る様な性格である。確かに、当時の俺は両親が構つてくれなくて若干暗めな性格をしていたが、それでいきなり殴りかかるのはどうかと思ったものである。そこで気付かされたのは、俺は結構な負けず嫌いで、かつ卑しい性格だということ。

殴られたのも気に食わなければ、所詮は女子。殴り返せば泣くに決まつている。それにこつちは年下だ。例え泣かしてしまつてもそこまでお咎めはないと踏んで殴り返した。子供ながらに最低な考え方を持つっていたのだ。

そして、顔面をグーで殴つたら、思いのほか力が入つてしまい、小さき姉は吹つ飛んでしまつた。尻餅をついたまま肩を小刻みに震わせる姉を見ながら、こいつはやばい、やりすぎたかと慌てていたら、姉はいきなり何かを投げつけてきた。殴られた場所が公園と言うのがまずかつた。それは砂利だつた。完璧な不意打ちに目を瞑るも、砂が目に入つてしまつ。こっちの目がつぶれた事をこれ幸いと姉は一気呵成な攻撃を仕掛けってきた。

まず鳩尾を何の躊躇いもなく突いてきた。あの衝撃は今でも覚えている。あの痛みと息苦しさはその後の人生でも一度も味わっていない。こっちの体勢が崩れたと思えば、足払いに地面に倒して、そのままマウントポジションだ。何の容赦もなく上から拳の雨を降らせてくる。防ぐこともままならず、一、三分殴られ続けていたと思う。これはもう無理と悟った所でようやく降参した。

攻撃がやんだけのを見計らつて目を開けると、ニヤリと笑った姉がこちらを見下ろしている。顔に痣なんてものはなく、あれはわざと食らつた振りをしてこちらの隙を作ろうとしたんだなど、幼いながらも姉の狡猾さに舌を巻いた物だ。

姉は俺を見下ろしながら一言。

『あたしの子分にしてやつてもいいよ』

後に聞いた話だが、どうやら姉の連續攻撃はある種のパターンで、それで何人もの男子をのして来たらしい。俺ほどに姉の攻撃を耐えたのは初めての事で、それを見込んで子分にしようとしたのだ。

俺はその時思った。この人に付いていきたいと。

さて、そんな攻撃的な姉ではあったが、それはあくまで昔の話だ。俺が大好きだったファンキーな姉はもういない。中学の時にいなくなってしまった。

「だから、姉よ。無言で後ろに立たないでくれ」

僅かに感じた気配を元に後ろを見ると、そこには我が姉の姿。髪の毛はぼさぼさで伸び切つており、肌も若干荒れています。うざつた前髪が邪魔して良く見えないが、眉毛も生やし放題だらう。全体的に空気が薄く、視界に入つても気付かない事が多々ある。

そう、今の我が姉は、私地味です暗いです、ヒアピールしてるのかと思えるくらいに変わっていた。

「忍者かお前は。何分前から後ろにいた」

「三十分前」

一般的な一階建の一軒家。そこでのリビングのソファに座つてマンガを読みながらお菓子を食べていた。そして、何となく後ろを振り向いているとそこには姉の姿。暗闇で後ろに立たれたらと思つと怖くて仕方がない。

「私は忍者じやない」

「どう考へても忍者だから。素質あるから」

天職が忍者としか思えない程に、気配を断つのが上手い。後ろに立たれて気付かない事なんて当たり前。部屋で寝転がっていた時、姉は侵入すら気付かせずに俺の部屋に一時間ほど立ち廻りしたこともある。

姉はこちらを見つめて何かを言いたそうにしている。髪の毛が邪魔をして表情もろくに見えない。昔は言いたい事は言ひ。言いたくない事も言ひ。それに加えて思つてもない事を言う人だったのに、今では口を開くことも少ない。口を開いても言葉少なめ。変わったものだ。

「何か用？　言いたい事があるなら言つてくれ

「こちらが促してようやく口を開く。

「今日、親いないからご飯作つて」

しかし、根本的な所は変わつていない。傍若無人な性格はこういう所に表れている。申し訳なさそうに口を開くでもなく、それが当たり前の様にご飯を作れと命令をしてくるのだ。

「わかった。何でもいいよな？」

こくんと頷くと、それに釣られて長い髪の毛もぱさつと動く。

姉は変わつてしまつたが、俺が姉の事を大好きなのは変わつていない。

夏は暑いものだ。日差しは強く、時折吹く風も生ぬるくて汗ばんだ肌を心地よくしてくれることはない。右を見れば、暑そうに歩く男

子生徒。前を見れば、うちわを持った女子生徒。左を見れば、どう考へても暑苦しい髪の毛の姉。姉は汗一つ搔いていない。

システムである俺にとって姉と登校するのは当たり前のことである。システムが姉と登校しないなんて有り得ない。いや、ツンデレ系のシステムならば、それに当てはまらないかも知れないが、俺はデレデレのシステムだ。例え、姉が登校中何も喋らなくとも一緒に登校しているという状況で楽しめる。

姉は俯き気味に歩いていく。たまに躊躇そうになるから地面を見ているという訳ではなさそうだ。俺からしたら躊躇する姉というのも、何となく微笑ましい。そして、躊躇した後にこちらをちらりと見る姉を見ると身悶えそうになる。たまんねえ。

そして、一言も交わさずに学校に到着する。校門で姉は何も言わずに俺から離れていき、俺は幾許かの寂しさを抱えながら離れていく姉を見る。姉は学校で俺と共に行動しようとしている。何を意図してそういうのかはわからないが、避けられているため無理に近付けない。

俯き歩いていく姉。  
そして躊躇する姉。  
いいね！

「おせむー！」

ちょっとビデジッ子が入っている姉を田で楽しんでいると、肩を強めに叩かれながら声を掛けられた。そちらを向いてみると、中学から割と仲が良い女子がいた。

「一七六」

名前を東別院そより。見た目、どこかのお嬢様っぽい雰囲気を持つ女子である。腰くらいまで伸びた髪の毛は手入れが整つており、目はぱっちり一重のくつきり。すっと通つた鼻梁に桃色の唇。それだけ。噂では物凄いお嬢様と聞く。しかし、本人はお嬢様っぽい見た目に反してフランクな奴で、良い奴である。

「何だー？」 そのぞんざいな挨拶せつ。もつ一回ーはー、おまよ

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

」の暑い中テンションの高い奴である。何が楽しいのかに」にこ笑っている。まるで夏の太陽だ。誰彼かまわず照らしてくる。

「まあそれでいいよつ。君はまたお姉ちゃん登校？」

「当たり前だ、東別院。姉と共に登校し姉と共に下校する。システムを名乗るならそれくらいは初歩の初歩だぜ」

「うわー、まったく恥ずかしがらないね！ それはそれでカッコいいよ！」

「お前はシステムのなんたるかをわかつているな。恥ずかしがる奴にシステムを名乗る資格はない」

「褒めたつもりはなかつたんだけどなー。ま、いいや」  
にこにこ笑つていてる。眩しすぎるくらいだ。そう言えど、姉の笑顔をここにしばらく見ていな。東別院の笑顔など何の価値もないのだ。姉だ。姉の笑顔を見たいのだ。

「東別院、最近姉の笑顔を見ていないんだけど

「え、私に言われててもわからないよ」

「どうにかして姉の笑顔を見たいんだけど、どうしたらいいと思う？」

「うーん……昔は明るかつたんだよね？」

「明るいなんでものじやなかつた。朝起きれば頭をはたかれ、はたき返したら地獄突きだ。殴り愛とはよく言つたものだよ」

「仲良いのそれ？」

「ノーザンライトボム、フランケンショタイナー、餅つきパワーボム、ブレーンバスターにDDT……へへ、思い出してもあの衝撃は鮮明に感じられるぜ」

まるで往年の名プロレスラーぱりに大技を繰り出してきたものだ。シャイニングウェイザードを食らつた時は『お前は三沢か！』と叫んだものだ。惜しい人を亡くしたな。

「姉はマジ天使。異論は認めません。だから天使の笑顔が見たいんだ」

感慨深く呟く俺を見て、東別院は何やら呆れた様な目をしている。

姉の良さが伝わらないのだろうか。

「……そのシステムさえなければなあ

「何がだ？」

「ううんっ、別に！ そうだね、昔に戻してみたらどうかな？」

「戻してみるつて、どうすれば元に戻せるんだよ」

「それは自分で考えないと。お姉さんが大好きなんだよね」

「ああ、大好きだ」

「シーケンスゼロで答えを返すなんて流石だね！」

「あんまり褒めんなよ。照れるだろ」

「褒めてないよ」

東別院のアドバイスはもつともだ。今の姉も嫌いじゃないと言うより大好きだが、昔の姉はもつと好きです。あのシャイニングウィザードが忘れられない。

口さがない連中は今の暗い姉を見て、何か中傷する様な事を言う奴がいるが、昔の姉はそんな連中には挨拶代りにジエロム・レ・バンナばりの左ストレートが爆発していた。しかし、それはもうないのだ。あのイカれた姉をもう一度見たい。

「東別院、ナイスだ！ 僕は姉を昔に戻す！ 名付けて『お姉ちゃん改造計画』だ！」

「声が大きいよつ。皆見てるー。」

とは決めたものの、昔の姉に戻す方法なんて思いつく訳がなかつた。今現在、俺と姉の身長差はそこそこのある。悲しいかな、姉の様な天使には俺みたいな無駄にでかくて重い人間にブレーンバスターをかますなんて出来ない。地獄突きにしろエルボーにしろ姉に鍛えられたおかげで、避ける能力も高い。昔と比べるとリー・チが短く感じるので無意識的に避けてしまうだろう。つまり、姉を発奮させてこちらを殴らせると言つのは使えない。

ならば他に方法があるかと聞かれたら、特に思い付かない。

「そこでだ東別院。何か方法はあるか?」

残念ながら俺の頭はあまりよろしくない。俺の通う高校は中々に偏差値が高い。何故俺の様なぐるぐるぱーが受かったと言つと、それは姉がこの高校に通つていたからだ。姉を思つ弟の想いが奇跡を生んだのだ。

「そこは自分で考えた方がいいって言つたよねっ」

学食で東別院とランチタイムだ。四限が終わり速攻で学食に來たので席は確保できた。周りには席を確保できなかつた生徒達がうろうろして、非常に混雑している。

「無理。思い浮かばない。悔しいけど全く思い浮かばないんだ……！」

「ごめん、姉ちゃん。俺じやあ無理みたいだ。駄目な弟を許しておくれ……！」

「うわあ……本氣で悔しそう」

「だから手伝つてくれ東別院よ。お前なら何かを思いつくだろ」

「そうだなあ……手つ取り早く変えたいなら見た目からじやないかな」

「別に俺は今の姉の見た目に對して何の不満も持つていない。人間は見た目じゃないのだ」

「カツコいこと言つてるけど、シスコンなんだよねっ。やうじやなくて、人は見た目に釣られるものなんだよ」

「と言うと？」

「お姉さんの見た目を君が変えたらいいんだよ。変わつた自分を見ると人は性格も変わつてくるからねっ」

「……一理あるかも」

ファンキーな頃の姉は見た目もファンキーだつた。スカートを履きながらハイキックなんてお手の物。ガチのプロレスごっこといつて、公園でパンツ一枚になつた時もある。髪の毛も今みみたいに薄ら長いものではなく、男子ぱりのショートカット。あの頃はいつも笑つっていた。俺を殴りながら。

「まずはあの髪の毛を切つたらいいと思つたつ」

「確かにそうだな。よしー、今日帰つたら切つてみよつー。」

とは決めたものの、俺はそういう細かい作業は苦手である。下手に変な髪形にしてしまつたら姉に申し訳なさすぎる。死んでも償いきれまい。

ならばどうするか。金さえあれば美容院へと向かわせるのだが、生憎と俺は万年金欠である。

「と言う事だから、東別院。お前の口ネでタダで髪の毛切れない?」

『何がと言つことなかわんないよ』

携帯で東別院に連絡を取る。お嬢様という噂が本当ならもしかするかもしねり。

『しようがないなつ。何とかしてみるよつ』

「お、マジで? 流石だな東別院。ありがとう」

『別にいいんだねつ。代わりにこれからはそよつて呼ぶことつ』

「ういー、わかつたそよつ

携帯を切つて姉の部屋へと向かつ。

ノックして姉の呴き声が聞こえたのを合図に扉を開ける。

「何か用」

「姉よ、今度の日曜に髪の毛を切りに行くから

「何で?」

「べ、別に勘違ひしないでよね! あんたのためなんかじゃないんだから! 僕が髪の毛を切りたいだけなんだから!」

「意味わかんない」

ああ、ツンが出てしまつた。基本デレテレの俺だが家では「ぐたまにツンデレになつてしまつ。しかし、このツンの出かたなりテレを予想出来るだろう。

「とにかく、日曜は予定を開けといて

「私、お金ないけど」

「俺の知り合いがタダで切れる所を紹介してくれる」「何あんたと一緒に行かないといけないの？」

「え……？ 俺と一緒にじゃいや、なの？ ベ、別に全然悲しくない

けど、それだとタダにならないから一緒に行かないといけないんだよ！」

「ああ、素直に一緒に行きたいと言えばいいのに。俺の馬鹿馬鹿馬鹿！」

「ふーん、わかった。ま、タダなら行くよ」

「……本当に？」

「本当だつて」

「じゃ、じゃあ日曜日ね。詳しい日時はまた教えるからー。姉と久しぶりの外出か。何を着ていこーや」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6281o/>

お姉ちゃん改造計画

2010年10月31日20時10分発行